

ひょうご 水百景

No.62 巖橋と雲津川（福崎町西田原）

～「銀の馬車道」の石橋を柳田國男ゆかりの地に移設・保存～



■ 辻川山公園に移設・保存されている石橋「巖橋（いわおばし）」

二級河川・市川の左支川・雲津川（くもつがわ）の中流部に架かっていた「巖橋」という名の石橋が、平成 11（1999）年河川改修に伴い撤去され、その後、柳田國男※¹（やなぎたくにお）の生家近くにある辻川山公園内の池に移設保存されています（写真-1）。

この石橋は、橋長 5.6m、橋幅 5.1m、2 径間の桁橋で、橋の横に立つ案内板には写真-3 のように記されています。



写真-2 辻川山公園内の柳田國男像

「辻川の南を岩尾川（雲津川）という綺麗な細い川が流れている。北条の方から来る所に橋があり、その橋は私の見ている間に石橋にかけ代えられたのでよく知っている。それは姫路から来る国道がついた時のことであった。」（「故郷七十年」より）

柳田國男さんの辻川の思い出の中に巖橋があります。明治 6 年（1873）以降、この道は馬車道（飾磨「姫路」～生野）として整備されました。その頃に石橋にかけ代えられた事を記しています。その後、道や雲津川の歴史の中で石橋の幅が広がりアスファルトがひかれたりと幾度となく変遷をとげてきました。

平成 11 年度の雲津川の改修時には川幅が広がり、元の場所に残す事が出来なくなりました。部材は保存しておき、このたびの整備に合わせて石橋を移設復元しました。安住の場として國男さんゆかりの辻川の地に・・・

平成 13 年 3 月

福崎町教育委員会

写真-3 巖橋移設復元の案内板から引用

写真-2 の柳田國男像の右に立つ石碑に刻まれた句は以下のとおりです。

をきな名を 人に呼ばるる ふるさとは
昔にかへる こちこそすれ

柳田國男が明治 42 (1909) 年 7 月、33 歳の時、出石よりの帰り、辻川へ帰省した折、友らに囲まれ「くにおはん」と呼ばれて少年時代をなつかしみ、ふるさとに残した一句です。

※1 柳田國男：明治 8 (1875) 年 7 月 31 日～昭和 37 (1962) 年 8 月 8 日。日本民俗学の創始者。神崎郡福崎町生まれで、最晩年に名誉町民第 1 号となった。没後に正三位勲一等。当時の池田勇人首相が「民間人とはいえ、これだけの人物に瑞宝章では軽い」と発言し旭日大綬章が供えられた。元官僚で貴族院書記官長、終戦後から廃官に至るまで最後の枢密顧問官を務める。

「日本人とは何か」その答えを求め、日本列島各地や当時の日本領の外地を調査旅行し、初期は山の生活に着目し、『遠野物語』で「願わくは之を語りて平地人を戦慄せしめよ」と述べた。

■ 「銀の馬車道」整備の一環として架けられた「巖橋」

福崎町に「辻川」と呼ばれる地域があります。生野銀山と姫路を南北に結ぶ生野街道と加西市北条から姫路市夢前町へ東西方向に抜ける北条街道が交わる交通の要衝であった地で、明治期のノスタルジックな町並みが今も残っています。

柳田國男は、人生を回顧して書いた著書『故郷七十年』の中で、「姫路から来る国道がついた」頃に、辻川の南の岩尾川（現・雲津川）に架かる橋が石橋に架け替えられたと書いています。

「姫路から来る国道」とは、明治 6 (1873) 年 7 月、フランス人師レオン・シスレーを技師長として工事に着手し、明治 9 (1876) 年に完成した“日本初の高速産業道路”「生野鉱山寮馬車道」（銀の馬車道）のことです。

『福崎町の文化財第三集～石造遺品』によると、元文 2 (1737) 年の『辻川村諸色明細帳』に、「石橋壱ヶ所長七尺 (2.1m) 幅三尺 (0.9m) 立会辻川村田尻村」との記載があり、「この橋が馬車道の道筋に位置していたことから、馬車道の修築に伴い架け替えられたもの」とのこと。つまり、元々石橋でしたが、馬車道修築に伴い、拡幅・改良したということです。ただ、元々の橋は木橋だったという資料もあるので、何ともいえません。

写真は、かつて雲津川に架かっていた石橋「巖橋」です。かなり老朽化しているように見えますが、このような状態になりながらも、拡幅され、橋面にアスファルトがひかれ、平成 11 (1999) 年まで現役の道路橋としてその役目を果たしてきました。

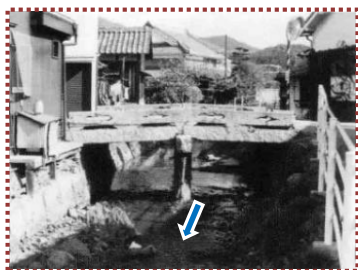


写真-4 巖橋（『福崎の道』から引用）



写真-5 巖橋上流側（福崎町提供）



写真-6 雲津川に架かる巖橋（福崎町提供）

■ 雲津川改修に伴い撤去された巖橋

巖橋架け替えの原因となったのは、「雲津川小規模河川改修事業」です。詳細は不明ですが、福崎事業所の F 所長が当時の関係者に聴き取りされたところ、昭和 58 (1983) 年度に事業着手、平成 5 (1993) 年頃に実施設計を行い、平成 6 (1994) 年に工事着手、平成 12 (2000) 年頃に竣工したそうです。施工区間は、中道橋の東、田原幼稚園付近から巖橋の上流までの 360m です。

巖橋は柳田國男ゆかりのものであることから地元で保存の声が上がり、検討した結果、移設保存とし、移設地が決まるまでの間、適当な場所に一時保管することに。

その後、北へ約 160m 行った「辻川山公園」の柳田國男生家下の池を改修して、そこに移設・復元することになりました。

通常、移設・復元する場合は、撤去時に部材に番号を打つのですが、それが打たれていなかったため、保管場所で仮組みして部材の位置を確認の上、現地に運搬して組み立てを行ったそうです。

倒れかけていた親柱も立派に復元され、さまざまな字体で刻まれた橋名は堂々としていて風格が感じられます。(写真-9～12)



写真-7 保管場所での仮組状況 (福岡町提供)



写真-8 本組状況 (福岡町提供)



写真-9 親柱①「巖橋」



写真-10 親柱②「いわおばし」



写真-11 親柱③「巖橋」



写真-12 親柱④「以波保巴志」

■ 昭和初期に行われた雲津川改修

どのような経緯があったのか不明ですが、東雲津橋の西約70mの所に「雲津川改修記念碑」および「雲津橋」と刻まれた親柱があります(写真-12)。

雲津川改修記念碑の表面には「御大典^{※2} 記念 雲津川改修記念碑」と刻まれ、背面の碑文は右下のとおりです。

当時、雲津川^{※3}は旧河川法(明治29年6月施行)対象河川ではなく、それを準用する河川でもなかったことから、改修費用は地元町負担でした。そのため、当時の田原村・三輪林之助村長は、大正7(1918)年から改修費用を積み立てていたようです。

11年間積み立てたところで、たまたま昭和3(1928)年に天皇即位に伴う「御大典」記念事業として県費補助を受けることとなり、昭和3(1928)年9月に起工、昭和4(1929)年3月に竣工しています。

工事区間は、昭和22(1947)年に米軍が撮影した空中写真を見ると、市川合流点から中道橋付近と考えられます。

川沿いにある家具屋のおじさんの話では、「昭和50年代初めに川が溢れたため、改修されて今の大きさになった。それ以前は2m程度の川幅だった」とのこと。

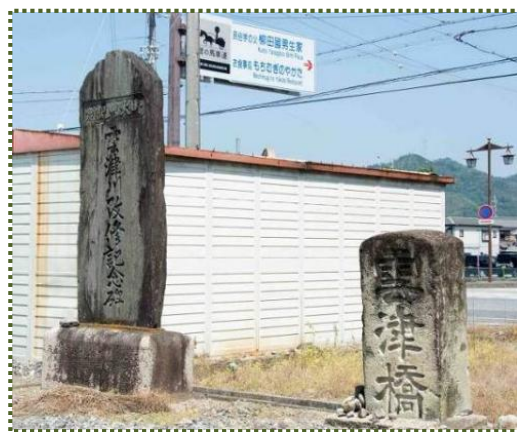


写真-13 記念碑と「雲津橋」と刻まれた親柱

雲津川ハ源ヲ八千種村ヨリ発シ流程一里余ニシテ市川ニ合流ス 田尻部落地内ニ入ルニ及ビ川中狭少ノ為メ大雨ニ逢フ毎ニ川水氾濫堤防決潰被害甚大 村民ノ常ニ改修ヲ希望シテ止マザル所 曩(なき)ノ村長三輪林之助氏ハ大正七年二月ヨリ改修積立金毎年壹千円ノ予算ヲ計上 昭和三年度ニ至リ壹万壹千円トナル 時恰(あたか)モ聖上陛下御一代ノ御大典ヲ挙行セラル、ニ当リ記念事業トシテ改修施行県費補助金四千九百余円ヲ受ケ勇氣百倍改修川ニ浴ヒ中七尺ノ道路モ共ニ新設ス 昭和三年九月二十四日起工 工費敷地費総額二万一千余円 従業人員三千二百余人各部落平等ニ出役 昭和四年三月二十六日竣功ス

昭和四年四月 建之

『兵庫の河川事業 50 年のあゆみ』を見ると、雲津川は昭和 45（1970）年度に「河川局部改良事業（局改）」として事業着手していました。昭和 51（1976）年災害では浸水被害は出たものの、護岸等の被災が小さかったため、局改の予算で対応したものとされます。

一方、雲津橋の親柱は、正面に「雲津橋」と刻まれ、右側面に「維時明治十一載戊寅十二月架之」、左側面に工事に関わった橋梁工や石工等の氏名、背面に金壹円以上の寄付者名（35名）が刻まれています。（雲津橋の位置は図-1 のとおり）明治 11（1878）年架橋ということですが、橋梁型式は不明です。昭和初期の河川改修の際に架け替えられ、旧橋の親柱が記念に残されたものと思われます。



図-1 雲津川整備全体図



写真-13 昭和30年代、田原小学校北を流れる雲津川
(神崎郡歴史民俗資料館展示写真)



写真-14 田原幼稚園北を流れる雲津川
(田原幼稚園は田原小学校の跡地にある)



写真-15 雲津橋と雲津川

※2 御大典：即位式の後に、五穀豊穡を感謝し、その継続を祈る一代一度の大嘗祭が行われる。即位式・大嘗祭と一連の儀式を合わせ御大礼（ごたいらい）または御大典（ごたいてん）と称される。昭和天皇の御即位式は、昭和 3（1928）年 11 月 10 日に京都御所にて行われた。

※3 雲津川：昭和 27（1952）年 12 月 27 日準用河川に認定。昭和 40（1965）年 4 月 1 日新河川法に基づき二級河川に自動指定。L=3,000m

■ 河童の河太郎と河次郎

柳田國男が著書『故郷七十年』に河童伝説が登場します。辻川山公園の「巖橋」横に「河童の河太郎（ガタロウ）と河次郎（ガジロウ）」の説明板があり、内容は概略以下のとおりです。

福崎町を流れる市川の左岸側に駒ヶ岩という大きな岩があり、そこに河童の兄弟（兄の河太郎と弟の河次郎）が住んでいました。兄弟は、川へ水遊びにやってきた子どもの足を掴んで引きずり込み、『尻子玉』を抜いてしまうので、子どもたちは河童を怖がって誰も駒ヶ岩で遊ぼうとしなくなりました。兄弟は後悔し、ある日、柳田國男先生に謝ろうと、生家のある辻川山公園にやってきます。河太郎は池のほとりで、河次郎は池の中で、何年も何年も先生を待ち続けました。とうとう河太郎は頭の皿の水がなくなり、池のほとりで固まって動けなくなってしまいました。一方、河次郎は池の中にいたので、今でも池の中から出てくることがあります。



写真-16 池の中から顔を出した河次郎に驚く巖橋上の園児たち



写真-17 固まって動けなくなった河太郎

■ モノローグ

このような石橋が、平成 11（1999）年まで現役の道路橋として使用されていたとは驚きです。

一方、巖橋の跡には河川改修の付帯工事として新しく橋が架けられています。残念ながら親柱もなく、橋名板も付けられていません。由緒ある「巖橋」の跡に架けられた橋としてはいささか寂しいものがあります（その後、橋名板が付けられています）。



写真-18 雲津川

スイレン属（睡蓮）

英名：water lily。スイレン科の属の一つで水生多年草。日本にはヒツシグサ（水草）の 1 種類のみ自生する。白い花を午後、未の刻ごろに咲かせることからその名が付いたと言われ、日本全国の池・沼に広く分布している。睡蓮はヒツシグサの漢名であるが、一般にスイレン属の水生植物の総称として用いられる。水位が安定している池などに生息し、地下茎から長い茎を伸ばし、水面に葉や花を浮かべる。葉は円形から広楕円形で円の中心付近に葉柄が着き、その部分に深い切れ込みが入る。葉の表面に強い撥水性はない。多くの植物では気孔は葉の裏側にあるが、スイレンでは葉の表側に分布する。根茎から直接伸びる花柄の先端に直径 5～10cm ほどの花をつける。



写真-19 辻川山公園内の池に咲いたスイレンの花

【参考資料】

- 1 『福崎の道～辻の出会いと道しるべ～』 福崎町教育委員会 平成 19 年 10 月
- 2 『福崎町の文化財第三集～石造遺品』 神崎郡歴史民俗資料館編集 平成 5 年 3 月
- 3 『故郷七十年』 柳田國男 平成元年 4 月
- 4 『兵庫の河川事業 50 年のあゆみ』 兵庫県土木部河川課 平成 3 年 3 月
- 5 『スイレン属』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：平成 28 (2016) 年 7 月 『ひょうご水百景』 No.62

改訂：令和 8 (2026) 年 5 月 『ひょうご水百景』 No.62